

佐伯史談

第八十四号

『郷土史研究』誌
通算第百六号

昭和四十七年九月七日

佐伯史談会

事務局 佐伯市大字稻塚寺龍護寺 羽柴少

巻頭言

因 雑 打 開 の 途

「佐伯史談」及び史談会の現状について

佐伯史談会副会長

幹事 羽 柴 弘

私凡この「佐伯史談」を編集しなからいつとも思うことであるが、一応その形式、内容共に一つの型に定着してはいるが、これで満足してよいのであろうか。また郷土の歴史と文化、自然環境などの追求を目指している佐伯史談会の運営は、こんなことでよいのであろうか。そんなことを原稿を執筆できりながら、或いは印刷の作業を一つづつながら思うのである。

そしてすぐ大きな壁に打つつかる。それは趣味の団体であるといえる研究会であるのに、それを自由に楽しむ余裕が会員には殆んどない。皆それぞれ職業をもち、一家の責任者として家族の生活を支え、かたわら地域社会に奉仕の役割をもち、毎日を忙しく立ち廻らしている。余裕をもつてみづろりと趣味を楽しむ時間の持てない人

が殆んどである。数人の共令の方、或いは縁気の方を除いて、他の殆んど全部の会員が身心共に少くも少くも生活に明け暮れ、いささか働かなくてはならない。これではその周辺身近なところには、どんな郷土資料があつても、それとジツクリ取組む時間が持てないという悩みをもつていられることを私は感じるのである。

そんな実情であるので、会としての研修活動も、よほどよい時、よいところをえらばよい限り、期待する数の

会員の出席が得られず、効果のあがる集会が打ち出せない。折角準備して待ち受けて下さった会場所材の方々に気の毒な場合が多い。

「史談」原稿の妨げについて、同じ事情で、一部の定連は片寄った感がある。何とか執筆者を救うたいが、今のところ、自立的に、精

本号内容

- 巻頭言 因雑打開の途 (羽柴弘) 一
- 研究 龍溪天野史談先生(山内武蔵)三
- 偶感 大南勢の陸田侵攻に (ついでに) 考察 (高木嘉善) 七
- 随感 楠 (市野蘭) 七
- 研究 佐伯政史と三浦井氏(佐藤寛一) 八
- 研究 鶴岡の営業許可願書と (羽柴弘) 九
- 研究 天瀬十村対(石高)(岩田基市)五
- 雑報 史談会と新郷と(三) (三) 三
- 資料 佐伯と四水田歩 (編) (三) 三
- その死後 (山本保) 三
- 集會案及資料忠告・器物寄附
- 員會案・集會報告・編集後記
- (一) (本号二十四ページ) 一

力の努力されていゝる方々を偏していゝて、紙面も広くないし、一杯一杯といたところである。

そんな現状ではあるが、ともかくも三百数十名の会員の数と力で、「佐伯史談」は発行をつづけ、「佐伯史談会」は手堅く運営されていゝて、先ず令格点が貰えるのではなにかと思ふが、これでノホホと構えていゝるつもりは毛頭ない。

近ごろ、紙面はうるおいが少なく、いささか素っ気ない感じである。見て楽しめる読みのものとして、例へば写真が巨しいかであるが、これは技術的に無理であるとしても、そのかわりにスナップも見取図、統計も地図などさふんたんに使いたいがか、これは寄稿の方々から、その地の考慮としてもらわなくてはならない。

次に文章が堅すぎるといふことがある。古文書などの引用原文は致しかたはないが、平易な文字、十分な読める文章への努力をのつづけたい。漢字熟語の多すぎるといふ、冗長な文章はとかく敬遠されるおそれがある。

それから、「佐伯史談」の機関誌としての体裁であるが、いささか質素にすぎ、窮屈ではあるまいか。世間一般の文化団体の機関誌に比べると、懸字版印刷であることにひげめを感じる。よくも読んで下せると感謝していゝるが、もつと技術的な改善、刷えはタイプ印刷に持ちこむなどのことと私自身思い、又他からのサゼツションも度々である。——これについては経済的な事情が大きくかゝる、また中にはこの懸字印刷を愛好、支持下さる向もあり、ずる／＼つづけていゝる次第である。決してこれ満足していゝるおかけではない。編集の軽便さ、印刷費の安上りの点から、当分はこのままで辛棒してもらふ外はあゝるまい。そのかわり精々努力して、読みぬすい、きれいな懸字印刷にし、懸字印刷ならではな味をツツプり出

したいと思つていゝる。

けれどもももつとはつきり態度をきめたいことがある、つまり御土史勉強の本質的な目標をはつきりとかけ、それとの取組及び全会員が意欲をもちやすべきではあるまいか。

第一は佐伯の自然、身近な環境をじっくりと見直し、山や川、野や里、海岸風景のすばらしさを知らう。最近かなり山は荒れ来ていゝるが、監視を怠ることなく、自然を守らなくてはならない。

第二は佐伯の歴史的文資料も、十分な文化財が意外と多い。特に毛利家のもの江戸時代の高政資料も、郷市に亘つてあちこちに残つていゝる文化財は、他郷市に比べて決して少くない。これらの解明には多くの人数と、かなり長い年月を要する。コソコソ積重ねることである。

それらは一俤だけかするのか。私共は「佐伯史談会」創設以来、すでに十三年のキヤリアをもつていゝる。意欲的に研修をつづけていゝる多数の会員を擁していゝる。この積み重ねて来た実績をかえり見、三百数十の会員の研修の意欲を思ふとま、私らにはこそ当然のこととしてそれを使命が与えられていゝるのではあるまいか。

前に述べたように、「佐伯史談」の編集に當つていゝる私は、高水会長外十人ばかりの市内在住の会員と共に、今「佐伯市史」の編さんノ事に當つていゝて、から左を張つて頑張つていゝる。今年は「佐伯史談」隔月発行といゝことで調整していゝるが、同じように来年もあつて行けるかどうか。それはいささか怪しい気がする。それかあつて行けるためには、会員諸氏の理解と協力とが要るわけであるが、お互い平易することなく、更に意欲をもめしめてあつて行こうではないか。

(おわり)